

【介護から自分を知る⑨】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

7 介護の現状⑦

高齢者と同居している家族等（近隣に住んでいる場合を含む）について、その援助の範囲及び期間についての説明をしたいと思います。

同居であっても家族の一人が何かの病気になると生活リズムが変化してしまいます。また、いろんなことを想定し、将来の生活に対することで悲観的になりやすい状況に陥ってしまいがちです。

生活に余裕があれば、対処の方法について動揺を少なくして考えることができますが、そういう家族は少ないと思います。たとえ生活に余裕があっても、いろんなことに対する神経を使い、生活リズムの変わる場合が多いことも事実ですし、家族の役割分担が変化します。

そのためにも事前にいろんなことを想定して話し合いすることが大切です。また、その前提になるのは、本音で話しあいをすることです。

将来のことについての計画を立て、どんな状態が発生した場合においても速やかに対処できるようにすることです。計画と異なったことがあってもそれを修正することで対応ができるように幅広く想定することが必要です。

全てを公的援助で賄うことは無理ですし、そのことを期待しないことが現実的です。家族においてできることは何か、その期間はどれぐらいか、今の状況将来の予測を含めて検討することが大切ですし、そのことは必然になっていますが、現実は何かが起こった時に考えればよいとの判断で過ごされているのが現状です。話し合うことについて嫌な内容だと思いますが、避けては通れないことですから、冷静な時に話し合うことが、将来の為にも必要ですので、一度検討されることをお勧めします。気をつけることは、曖昧な内容の話し合いを結論にしないことです。また、子ども等の全員が参加して話し合いをすることも必要な条件です。

話し合いの時期は、早い方が良いと思います。そのことで時代の変化、環境の変化に対応した計画が可能になると判断できます。家族の年齢構成が高くなってきていることも現実ですから、そのことも了知することが必要です。

何かが起こった場合には、誰がどのような範囲で援助するかの役割分担表を作成しておくことが便利だと思います。また、援助の期間によっても変化が伴ってくることも必然ですから注意して検討下さい。

現在の社会は、制度等を知ることが第一ですから、解からないことは専門家等に相談することを必要です。現実の援助には、金銭面における苦労、人的援助における苦労があります。

少数の家族で支えていくことは、各種の問題が発生することが予想されます。その第一は生活の疲れ、第二は心身の乱れ、第三は将来への不安など多くのことがあり、考えていたことよりも困難な問題が発生することも現実です。

在宅生活が可能な条件、できなければ施設入所を考える必要があります。そのことに対する家族の理解、当事者の思いを大切にしながら、どこまで何をベターとして生活をしていくのかを考えて行動してください。家族の全員が何かを犠牲にすることも必然ですし、その堪えられる範囲をはっきりしていくことも必要だと思います。

現実を見ること、逃げないこと、何時かは通る道ですから、将来の姿を真剣に本音で話し合い、現実に対応できる計画を持つことが必要です。